

医科・歯科連携の実際

第6回

NST回診に参加し全身を診ることで 視野や知識、技量の広い歯科医師に

佐々木勝忠

岩手県・奥州市国保衣川歯科診療所歯科医師

■ 包括ケアの広がり と 歯科

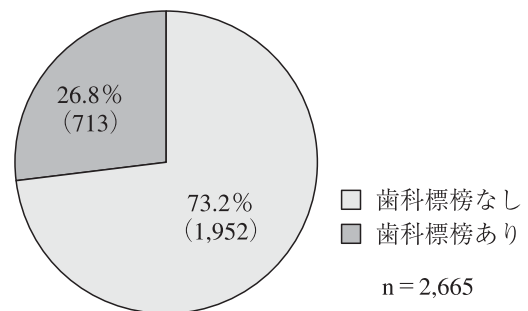
国診協が提唱している“包括ケア”という言葉が、保健・医療・介護の現場で当たり前に使われていることに、国診協の目指す地域医療の考え方の広がりを感じたいところである。

そのような流れの中で歯科はどうであろうか。以前から、国診協の組織の中に歯科保健部会をつくっていただき、いろいろな委員会等にも歯科医師を登用していただいている。国診協の中で歯科は、包括ケアの仲間として認知されているし、私たち国保の歯科医師もやりがいのある仕事ができると思う（経営の問題を除いて）。しかし国診協の外に出ると、歯科はまだまだ包括ケアの一員としての認知が低いし、歯科医師自身も包括ケアの一員になろうとする意識が薄い。私たちが国診協で養っていただいた包括ケアの考え方を、国診協の外にも広める責務があるように思える。

■ 病院における歯科標榜

平成22年10月現在、独立行政法人福祉医療機構WAM NETに公表されている8,750病院を対象とした日本歯科総合研究機構の病院アンケート結果から（有効回答は2,665病院で、有効回答率は30.5%）、歯科診療科

図1 歯科標榜の有無



「病院でのチーム医療における歯科」日本歯科総合研究機構 病院アンケート結果から
石井拓男、恒石美登里 日本歯科医師会・日本歯科総合研究機構：日本歯科医師会雑誌Vol.64 No.42

のあるという回答は4分の1ほどで（図1）、すべての病院では22%程度といわれ、歯科診療科の標榜がないと回答した病院が非常に多い。なお、われわれの国保病院での歯科標榜は24%である。

■ 地域での医科歯科連携

私の勤務している岩手県奥州市国保衣川歯科診療所は、岩手県の県南、金色堂のある平泉町の北隣にあり、地域の人口は13万人ほどである。東北新幹線水沢江刺駅や高速道路の東北道が通っており、交通の便のいい農村地帯である。私は奥州市歯科医師会に所属しており（図2）、地域には地域急性期病院の岩手県立胆

図2 奥州市の所在地と奥州市歯科医師会



奥州市歯科医師会
 地域 岩手県南部
 市町村 奥州市、金ヶ崎町
 人口 約 123,000人
 会員 64名



写真1 岩手県立胆沢病院
 地域急性期病院、病床数351床

岩手県立二戸病院副院長 伊藤先生



岩手医大病院栄養看護師 平沢さん



沢病院 (351床) がある (写真1)。

岩手県地域医療研究会 (国保診療施設の研究会) では、平成16年に「摂食・嚥下障害」、平成17年には「多職種による栄養改善」のシンポジウムを開催、私はシンポジストとして参加させていただき、歯科との連携の必要性を訴えた (写真2)。

この岩手県地域医療研究会にオブザーバー参加していた岩手県立胆沢病院の上野栄養管理室長さんが、平成17年に胆沢病院のNST勉強会に私を講師として呼んでくださり (写真3)、そこから胆沢病院との関わりが始まり、NST回診に隔週ぐらいで参加させてもらうことができた。ま



元・藤沢町民病院管理栄養士 加藤さん



衣川歯科診療所 佐々木

写真2 岩手県地域医療研究会でのシンポジウム (右下が筆者)

た、月1回のTNT-C (栄養療法ケーススタディ) の勉強会にも参加させていただいた。

衣川歯科診療所では月曜から金曜日まで診療し、月・金曜日は夜間診療もしている。歯科医師2人体制で (平成22年度まで)、私だけが隔週で半日の診療を休み胆沢病院のNST回診に参加するという事は、若



写真3 胆沢病院のNST勉強会で講演

い歯科医やスタッフに申し訳ないという気持ちがあり、なかなか隔週で毎回参加するという事もできなかった。隔週参加させてもらおうと胆沢病院に断言したものの、休んだりして持続が困難になりそうに思えてきたこと、毎週NST回診が行われているのにこのような状態ではいけないと気をもんでいたことから、奥州市歯科医師会が組織的にNST回診に参加することがよいと思うようになってきた。

また、NST回診に参加し「全身を診る」という、今まで歯科（口腔外科以外の一般歯科医師）に欠けていたことを経験することで、視野や知識、技量の広い歯科医師になれるということから、多くの歯科医師に参加してもらいたかった。しかし、奥州市歯科医師会の役員の方々に相談しても、「まだまだ会員も理解していないし、歯科医院経営の問題もあるので時期尚早」という声があり、なかなか前に進まなかった。

■ 近くにも医科歯科連携の理解者がいた

その後、平成18年8月30日に胆沢病院の栄養師長から、NST勉強会に再度講師として呼んでいただき、その日の夜は無料招待のNST関係者の飲み会があった。宴会の席でNSTディレクター北村副院長先生（現・岩手県立中部病院院長）と松本院長に歯科医師会との組織的連携を提案したら、「考えてみる」という返事であった。

翌日の31日の昼過ぎ、まだ午前診療中に北村先生から「組織的な連携をすることにしたので、準備をお

願いたい」と感動的な電話をいただいた。昨日の夜の宴会での提案を翌日には決定している胆沢病院のすごさ、そして近くにも医科歯科連携の素晴らしい理解者がいたことに感激し、流れ出る涙を隠すことができなかった。

■ NST回診参加のための準備

平成18年8月31日に県立胆沢病院からのNST連携の提案を受け、次のことを行った。①県立胆沢病院関係者と奥州市歯科医師会執行部、NST回診歯科医師との懇談会、②奥州市歯科医師会としてNST回診歯科医師を地域歯科保健部から5名選定（後に自主参加した1名を加えて回診歯科医師は6名）、③NST回診に参加する歯科医師の研修会。この研修会は、日本静脈経腸栄養学会（JASPEN）のTNT（Total Nutritional Therapy）の講習を受けていた私が行った。

■ 歯科の栄養回診システム

NST回診への歯科の参加は、平成18年12月より開始された。NST回診歯科医師は6名（奥州市歯科医師会の推薦）で、当番の一人の歯科医師が毎週行われるNST回診に順番に参加する。回診患者情報は前もって当番の歯科医師にメールで送られる。回診後、回診した歯科医師は、患者の状態や指導内容、実施事項等を回診票に記載し、回診歯科医師と胆沢病院栄養管理室、奥州市歯科医師会専務にメールする。そのほかに、回診歯科医師と歯科医師会専務には、回診日の日誌をメールすることで情報の共有を図っている（図3）。

回診中に歯科治療の必要を認めた場合は、歯科治療の必要性をカルテに記載、主治医から病棟看護師長を通して、歯科医師会側の窓口になっている森岡先生へ往診歯科診療依頼となる。森岡先生からかかりつけ歯科医師へ連絡、訪問歯科診療を依頼するが、かかりつけ歯科医師が訪問困難な場合やかかりつけ歯科医師がいない場合、緊急性がある場合はNST回診歯科医師に訪問歯科診療を依頼する（図4）。

図3 胆沢病院・歯科医師間の情報交換

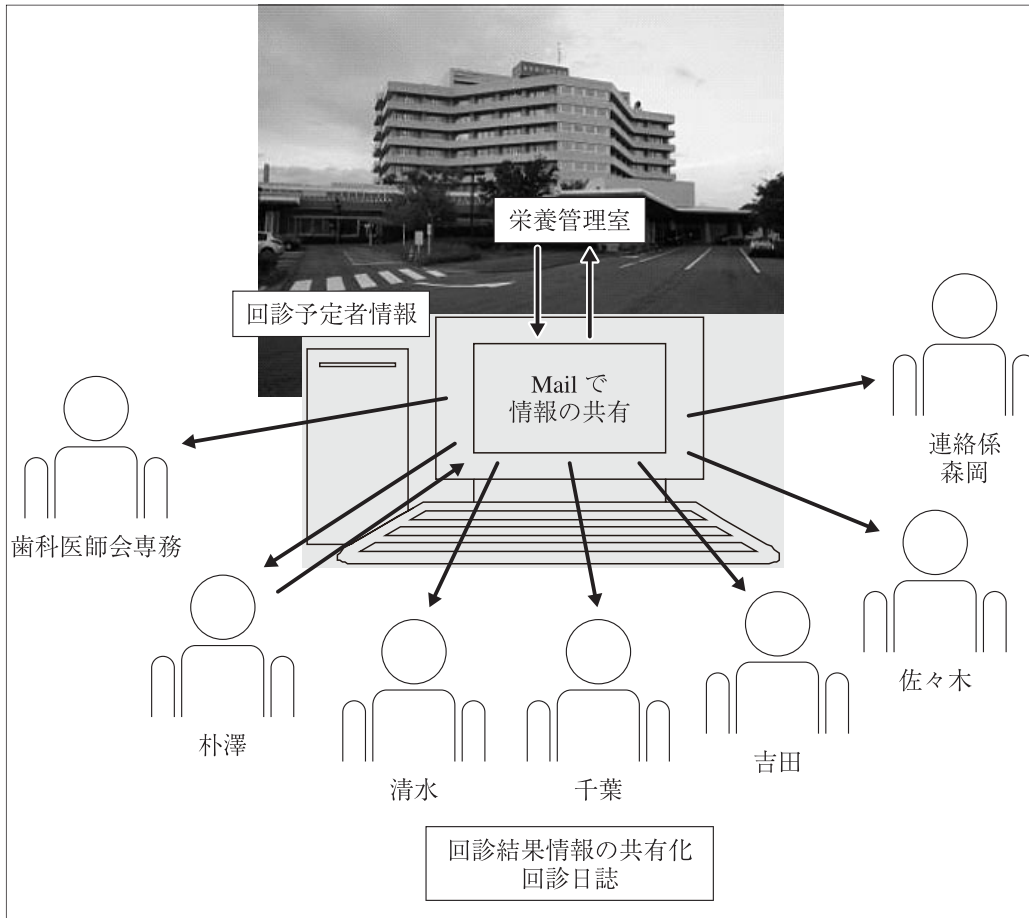
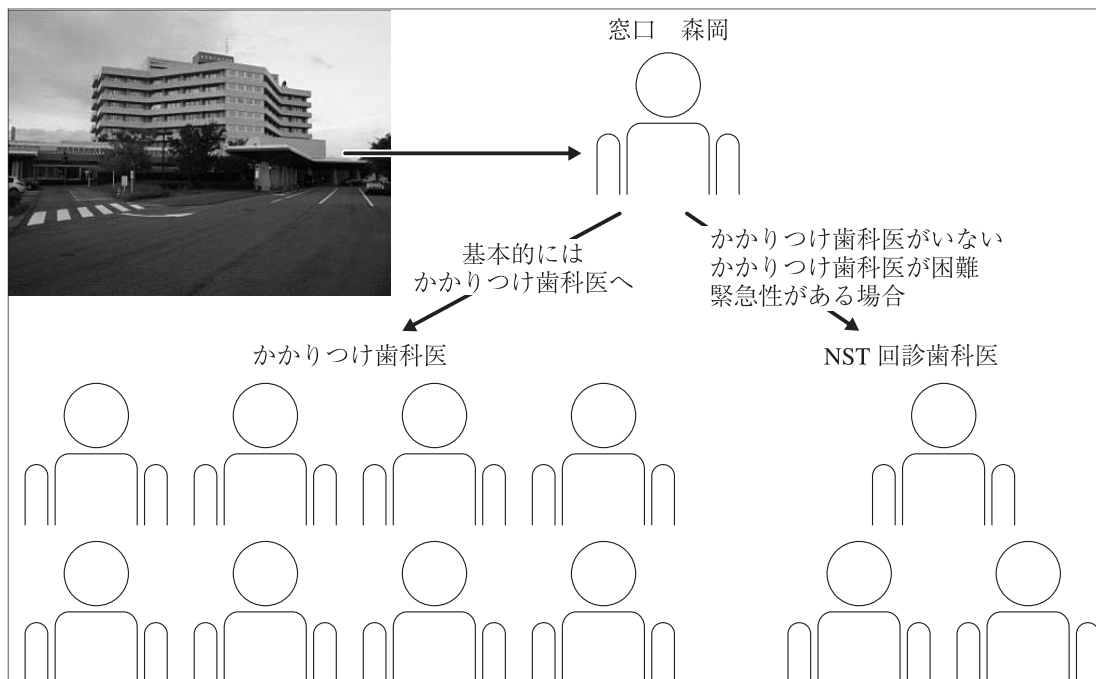


図4 要歯科治療必要者への対応



■ NST歯科連携からさらに

回診に参加している歯科医師は成長した。回診を開始してから2年後に衣川歯科診療所職員休憩室で勉強会と称して飲み会を行った(写真3)。今も居酒屋などで飲み会をするが、皆前向きで視野も広くとても素晴らしい仲間である。NST回診を私たちだけで行うのではなく、たくさんの歯科医師に参加してもらいたいといういろいろ戦略したが、参加してくれる会員はまだまだ少ない。

そんな中昨年度、保健所事業で岩手県立江刺病院でのNST連携モデル事業を行ってもらい、それに若い会員が参加してくれ、次につなげる希望が見えてきた。また、私が奥州市歯科医師会での推進役を行わなくても、仲間がいろいろと動いてくれるようになってきた。森岡先生は、胆沢病院のNSTの窓口でまとめ役、回

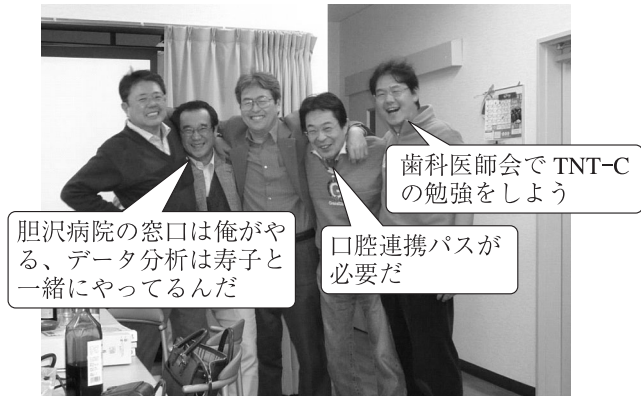


写真3 勉強会と称した飲み会
NST回診に参加して2年、回診歯科医師の意識の変化



写真4 ケアマネージャーとの作業部会

目的：連携強化、情報交換
構成：ケアマネ側 6名
歯科医師会側 4名
日程：年3回
内容：連携事例の検討
情報交換
研修会企画
連携ツールの改良
地域への周知活動・企画

診患者さんのデータをまとめて発表する。清水先生は江刺病院との連携づくりから、今年度は民間の病院で緩和ケアに関わるNST回診を開始した。千葉先生は、胆沢病院のすぐ近くなので、何かあればすぐに歯科往診を行ってくれる。朴澤先生は、胆沢病院に誤嚥性肺炎で再入院する患者さんを何とかしなければならないと考え、ケアマネジャーに歯科の重要性を認識してもらい、そして、お互いの垣根を低いものにするため、協議会(作業部会)を何度も開催した(写真4)。そして、ケアマネジャーが口腔の問題点を発見し、FAXで歯科につなげるシステムを構築した。現在も進行中で、ケアマネジャーからのFAX歯科診療依頼が増加している(図5)。

昨年の勇美財団(日本の在宅医療を推進する重要な財団)で、歯科代表としてこの実践について講演することができた。

図5 現在までのFAX依頼件数

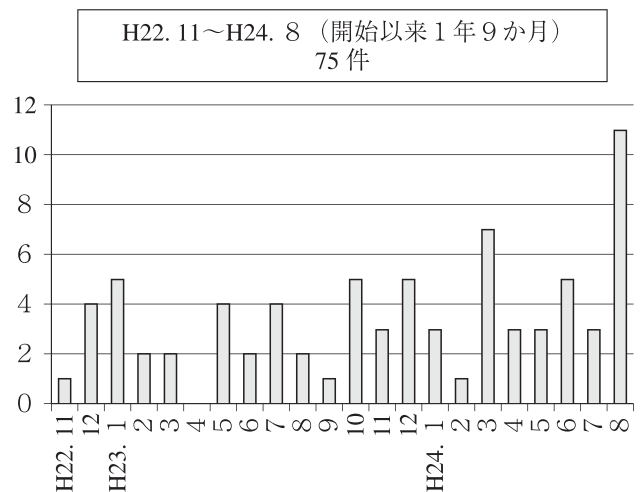
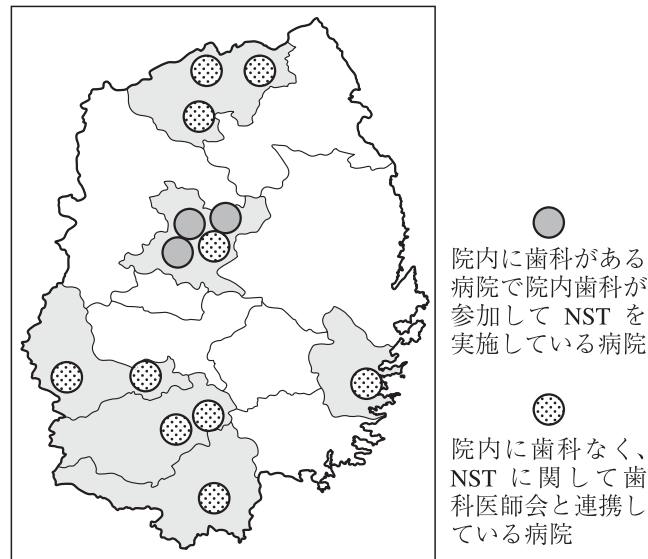


図6 地区歯科医師会とのNST歯科連携の推進



■ 岩手県内でのNST歯科連携

岩手県には中核地域に27の県立病院・診療センターが配置されており、徐々にNSTを立ち上げている。また県立病院・診療センター以外にNSTを立ち上げている病院は、岩手医大病院、盛岡日赤病院、盛岡市立病院、一関病院、藤沢町民病院などである。歯科とNST連携している病院は平成24年10月現在、7県立病院と盛岡日赤病院、国保沢内病院、美山病院で、13地区歯科医師会のうち6地区歯科医師会が、組織的連携に関わっている(図6)。沿岸の2県立病院も歯科医師会との組織的連携を希望しているが、震災の影響で地区歯科医師会が連携できない状況にある。岩手県内の歯科医師は、NSTという言葉に対する認識は高いものになってきている。

がん診療における医科歯科連携が叫ばれている。岩手県においてはNSTにおける医科歯科連携の基盤ができ上がっているため、がん拠点病院ばかりでなく、地域のがん診療連携拠点病院との連携の構築が行われているところである。

■ まとめ

まだまだ歯科医師会員には、医療連携に関わることのできない方々が多い。医学教育の中で医学部、歯学部と別れて教育されているが、器官は全身の各々に別れて存在するものではない。この教育や保険制度などの隔たりが今日の医科・歯科の弊害をつくり、さらにお互いの分野に疎遠になっていることが、医科歯科連携の進捗を低迷させていたように思える。

しかし、国診協の中の歯科医師の包括ケアの考え方は、これからの医科歯科連携に必要なもので、国診協の中で歯科部会を20年以上前に立ち上げてくれた山口常任顧問はじめ、広い視野をお持ちの多くの医科の先生方がわれわれを育ててくれたことに、感謝せずにはいられない。歯科界を見ると、依然として医療連携に乗れない歯科医師が多いのは残念なことであるが、今の日本歯科医師会大久保会長が「生活の歯科医療」を訴えながら医療連携を進めていることもあり、明るい兆しが見えてきているように思える。